

2017/12/17

「パウロのクリスマス」

■パウロのクリスマス

「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:5)

闇とは、いったい何でしょうか。闇がわからなければ、光の意味が分かりません。

今日は、パウロにとっての闇は何だったのかということを探りながら、クリスマスの意味をひもといってみましょう。

パウロが生きた時代は、ギリシャ哲学がめざましく発展した時期でもあります。哲学とは、人間の土台を知ろうとする学問です。

当時の哲学の主流は、人間には自由な意志があり、自分で善か悪を選択することができ、善を選択すれば完全になって、神に近づくことができるという考えです。実は、今もこのように考える人は多いのです。

もし、善悪を自分で選択できるという前提に立つなら、罪は自分で解決しなければいけない問題です。そうすると、教会は、ただ律法という善を教え、善を選ばない人を責めればよいということになります。当時のパウロも、律法の行いを実行することで、完璧になることを目指していました。ところが、彼は、それでは、どうにもならない自分に気づいたのです。

哲学の世界でも、17世紀になると、パスカルという人が、人は本当に自由に選択できる意志を持っているのかと、疑問を投げかけました。そして、次々にそれに同調する人が現れ、キルケゴールは、私たちは自由に選択しているのではなく、不安に支配されているのだと結論づけました。また、20世紀には、フロイトという心理学者が、無意識あるいは潜在意識という自分では意識できない部分に、人は支配されていると分析しました。

パウロは本気で完全になることを目指したために、哲学が2000年かけてたどりついた結論に達しました。それは、人は自由に善を選ぶことができないということです。これが彼の苦しみであり、彼の闇となったのです。

人間は、神のいのちによって造られた存在です。私たちの土台は神であり、私たちの中心にある本質は、神ご自身です。神が土台だからこそ、私たちには自由があり、人が自由を求めるのは、神が自由な方だからです。しかし、今、私達は、その本質である神と、疎外された状況にあって、神とかけ離れているために、自由がありません。そのため、人は常に不安を抱えています。そして、この不安によって、罪を犯すのです。罪というどうにもならない不安に対して、それを受容する対処療法として近年発展したのが、カウンセリングです。罪に律法を押し付け、悔い改めよというやり方では、ただ人を苦しめるだけだと、人は気づき始めたのです。

このように、人が罪を犯すのは、個人個人に責任があるのではなく、構造に問題があります。ですから、この構造に対処するのでなければ、人は罪に対してどうすることもできません。聖書をよく読むと、パウロがそのことをすでに語っていることがわかります。パウロは、善を選択すれば、神に近づき、幸せになれると信じて、律法の行いを目指しました。ところが、完全な自分になろうとすればするほど、不完全な自分でしかないということに気づいたのです。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。」（ローマ 7:15）

■パウロの闇

私たちは、今、神という人の本質から疎外されて生きています。それは、アダムの罪によって死が入り込んだことが原因です。「死」とは、神とつながりがなくことです。神と離れているため、私たちの現実、自分が理想とするところとは、かけ離れてしまっています。死によって、私たちの中に悪が生まれ、それが自分を支配し、自由にしてくれないのだとパウロは気づきました。

今は本質から疎外されていたとしても、魂は完全であった自分を知っています。そのため、人は、不完全な自分に不安を抱き、完全を求めています。これは潜在意識の中で起こっていることなので、人は不安の原因が神との疎外関係にあることに気がつきません。自分が不安なのは、自分が不完全なせいだと思いこんでいるのです。すべての人が、自分が完全になったら自分を受け入れられる、相手が完全になったら相手を受け入れられると思って、自分にも人にも完全を要求して生きています。しかし、完全を目指せば目指すほど、不完全な自分に気づき、不完全な相手を赦せなくなります。これが私たちの心の闇、すなわち、苦しみです。人は、完全なものを求めたために、不完全なものを愛せなくなりました。パウロは、この自分の苦しみを、次のように表現しました。

「そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」（ローマ 7:21）

私たちを支配しているのは、悪であり、罪です。そのために、自分でしたいと思うことができないのです。それは、神との結びつきがなくなったことが原因です。この時のパウロには絶望しかありませんでした。そもそも人は神に似せて造られており、神は愛であり、本来私達は誰でも自由に愛せるように造られています。ところが今私たちは、それが全くできません。不完全ということばを聖書の言葉に置き換えると、罪人ということになります。完全なものしか愛せない私達は、罪人を愛することができないのです。パウロは、次のように語

っています。

「それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。」(ローマ 3:10)

パウロは、完全になれると思って、努力を続けていたのに、それはかなわないと知ったのです。なんとみじめなことでしょうか。むしろ、完全になろうとすればするほど、人を裁くようになっていきました。なぜなら、完全を目指す人は、完全な人しか受け入れられないからです。その結果、人を愛することができなくなっていきました。完全な人しか受け入れられないということは、自分を受け入れることもできません。人を裁く人は、自分を受け入れられないのです。

パウロは、自分のみじめさに絶望しました。しかし、これが彼にとって転機となりました。多くの方は自分を愛せないことや他人を愛せないことに気づいても、言い訳をしたり、目を背けたりして、つらさと向き合おうとはしません。しかし、パウロは、絶望することによって、光を見つけました。絶望という真っ暗な世界の中で、イエス・キリストだけが彼の光であることに気づいたのです。

■不完全な者を受け入れてくださる神

パウロのクリスマスは、闇の中に差ししている光に気がついたところから始まります。彼は、神からの啓示を受け、行いとは関係なく、こんな自分を愛して受け入れてくださる方がいるということを知ったのです。それがイエス・キリストです。

「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:7-8)

イエス・キリストは、不完全な者のために死ぬという、常識を超越した道を選びました。パウロは、それまで、完全にならなければ神に受け入れられないと思っていましたが、イエス・キリストは、完全な者を拒否し、不完全な罪人を招き寄せる方だったのです。「もし罪はないというなら、あなたは偽り者であり、キリストを偽善者にする」と、聖書に書いてあります。パウロは、自分が神の福音を読み違えていたことに気づいたのです。

パウロが完全な者になろうとしていた目的は、愛されるためです。しかし、彼は、思いもかけなかった事実を知りました。それは、神は不完全な罪人を愛し受け入れて下さるということです。神は、罪人である弱い私を受け入れてくださるのだと気づいた時、彼は光を見ました。そして、この事実を受け入れた彼は、自分自身を受け入れる勇気をも手にすることが

できたのです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」

(ローマ 7:24-25)

彼は、惨めで罪深い不完全な自分を受け入れることができたのです。さらに、不完全な自分が受け入れられたことを知ることで、不完全な相手を受け入れられるようにも変わっていきます。こうして、愛が回復し、それが私たちを自由にしていきます。

世の中の問題は、すべて、不完全な相手を受け入れられないことによって起こっています。人の本質は、愛したいという思いです。愛したいのに愛せないことで、私たちは自由を失い、争いが生じ、これが自分自身を苦しめています。ここから脱出する方法はたった一つ、あなたを受け入れて下さる方を、あなたが受け入れることです。それが、神の救いを受けるということなのです。

不完全な自分を認め、そんな自分を神が受け入れてくれたことを自分も受け入れるところに感謝が生まれ、人は強くなります。パウロはこの後強くなったのです。

人は完全になれたら強くなれると思うものですが、事実は逆だったのです。立派な人間になろうと思えば思うほど、まわりの同意を得ようと、人の目が気になって人の目の奴隷になり、自由が奪われます。私たちが、この世の心づかいの奴隷になってしまうのは、完全になろうとするからです。人の目に応えようとする自分と、現実の自分とのギャップに耐えられなくなり病んでしまうようになります。

パウロは、弱い自分をそのまま受け入れれば、人は強くなると知りました。人から何を言われても怖くないのです。自分はその通りの人間で、罪人のかしらだと認めているからです。自分の弱さを受け入れることで、神の支えという強さを得、迫害も死も感謝できるほどに強くなったのです。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」(Ⅱコリント 12:9-10)

「私が弱い時こそ、私は強い」ということを知ったパウロは、暗闇から抜け出す道を人々に伝えて生きるようになりました。

完全になることを目指すと、不完全な者は受け入れられないため、人も自分も愛せなくなります。すると、人からどう思われるか、恐れが増します。これが人を苦しめるのです。聖

書は、「まったき愛は恐れを締め出す。」と教えます。愛せるようになると、恐れは締め出され、解放されるのです。完全になることで不安から逃れようとするのは、逆効果です。愛することができるようになるには、自分が不完全でも神に受け入れられていることを受け取らなければなりません。

私たちが強くしてくれるのは、自分ではなくキリストです。自分が、どうにもならない弱い人間だと気づいたら、弱い自分を自分の力で何とかしようとするのではなく、神に心を向けましょう。神があなたを強くしてくれるからです。すると、感謝が生まれます。パウロは、自分自身に生れた感謝を、次のように証ししています。これがパウロにとってのクリスマスです。

■パウロに生まれた感謝

1. パウロは、患難さえも喜べるように変わりました。それは、患難に出会うと自分と向き合うことができ、自分の弱さや無力さを知って、それを受け入れて下さる神の愛がわかるようになり、希望が見えるようになるからです。

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」

(ローマ 5:3-4)

忍耐とは、我慢することではなく、向き合うことです。患難と向き合い、自分の弱さを知ると、神により頼むようになります。つらいことに出会うと、神の罰だと考える風潮がありますが、そうではなく、希望に気づくチャンスです。患難が闇の中の光となるのです。これが、本当のクリスマスです。

2. パウロは、自分は神によって生かされており、自分が生きているのは、キリストのおかげだと知りました。

「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」(ローマ 11:36)

すべてのことが神から発していることがわかれば、クリスマスを祝っているということです。神に生かされていることを感謝するようになります。私の土台はイエス・キリストだと言っています。このことが彼の喜び・感謝でした。自分が、イエス・キリストという土台の上に建てられていることを喜び、感謝するようになります。

3. 「また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」（コロサイ 1:12-14）

私たちが受けた相続分とは、罪人でもあつても神が私たちを受け入れて闇の圧政から救い出してくださる、というものでした。闇とは、愛せないことです。闇から救い出されて、愛せるようになったことを感謝しようとパウロは語り、パウロは次のように教えています。

「あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」（コロサイ 3:17）

イエス・キリストが地上に来られるという贈り物によって、パウロはすべてのことが感謝できるようになりました。クリスマスを祝うとは、すべてのことが感謝できるようになることなのです。